

日本ロシア文学会 関西支部 会報

発行 日本ロシア文学会関西支部事務局
 住所 〒651-2187 神戸市西区学園東町 9-1 神戸市外国語大学 藤原潤子研究室
 電話 078-794-8237 Email junko@inst.kobe-cuifs.ac.jp
 郵便振替口座 00960-2-48831 日本ロシア文学会関西支部

春季研究発表会・総会の報告

2017年6月10日(土)に関西支部の春季研究発表会・総会が同志社大学で開催されました。

研究発表会

今回は3件の研究発表がありました。発表者と題目は以下の通りです。この会報の後半に報告要旨を掲載しています。

- (1) 青山忠申氏〔京都大学大学院〕
『アヴァクム自伝』のアクセントに関する考察
—自筆写本と19世紀写本の対照に基づいて
司会:岡本崇男氏〔神戸市外国語大学〕
- (2) 中野悠希氏〔京都大学大学院〕
ロシア語における斜格形と再帰代名詞との照応の
統語的・意味的条件について
司会:服部文昭氏〔京都大学〕
- (3) 岡本崇男氏〔神戸市外国語大学〕
もう一度人名 Гюрги について
司会:田中大氏〔同志社大学〕

支部総会 (一部、総会後に決定されたことを含んでいます)

1) 会員の異動

- ・入会者: バイビコワ・エレナ〔神戸市外国語大学〕、青山忠申〔京都大学大学院〕
- ・退会者: カザケーヴィチ・マルガリータ、カザケーヴィチ・ヴァチェスラフ、岡部純子
- ・ご逝去: 小野堅、柿沼伸明、生森将人

2) 日本ロシア文学会理事会の報告(2016年12月18日東京大学で開催)

- ・2016年度第66回大会の総括と会計報告: 懇親会費の徴収方法について(外国人参加者から徴収するのか、退職者をどのように扱うのか)
- ・2017年度第67回大会について: 10月14日(土)、15日(日)に上智大学で開催予定。
- ・出版計画: 日本ロシア文学会(編)『ロシア近現代文学大辞典』(勉誠出版)。3年後を目処に刊行予定。予価9,800円。

3) 次期運営委員会メンバー

理事: 中村唯史(支部長を兼任)、ヨコタ村上孝之、大平陽一、藤原潤子
 学会誌編集委員: 大平陽一、北見諭 (大平氏が編集委員長になったため、編集委員(言語分野)をさらに一名追加推薦する予定)
 京滋奈等の会員1名: 中野幸男
 阪神等の会員2名: 小田桐奈美、横井幸子
 事務局: 服部文昭
 監事: 青木正博、扇千恵

4) 次期開催校

秋季研究大会・総会は12月2日(土)に大阪大学で開催することが決まった。

春季研究発表会報告要旨

『アヴァクム自伝』のアクセントに関する考察—自筆写本と19世紀写本の対照に基づいて

青山 忠申〔京都大学大学院〕

『アヴァクム自伝』は17世紀後半、ロシア北方の僻地プストゼルスに幽閉されていた正教会古儀式派の長司祭アヴァクムによって執筆された聖者伝風の自伝的著作である。この作品は、作者であるアヴァクムによって異なる時期に加筆修正された四つの版の系統に各々属する多数の写本が現在残っているが、本発表ではその中でもアヴァクム自身による手稿のひとつと、19世紀中葉以降に写された手稿のひとつを比較して、後世の写字生がいかにかオリジナルの写本のアクセントを受容し、それをいかにか自らの転写する写本に反映させたのかについて考察したことを報告する。

今回調査したふたつの文献は、現存する『アヴァクム自伝』の諸写本から判断できるかぎりでは最も遅い時期(1674年末から1675年初め頃)にアヴァクムが編集した版の系統に属す。両文献間のアクセント以外の言語的特徴、すなわち語順や語彙、語形等の異同が、二世紀近い時間的隔りがあるにもかかわらず極めて少ないことは、本発表に先行するマルシエフやデムコヴァらの研究によってすでに知られている。そうした言語的特徴の類似の度合いは、対象となる文献の『アヴァクム自伝』の写本体系におけるテキスト学的な位置を決定する上で重要な要素となっているが、しかしながらアクセントに関する同種の研究は、『アヴァクム自伝』に限らず例を見ない。現存する複数の写本に幸いにもアクセント記号が付されていることから、それらを比較してみる価値はある。その上、テキスト学におけるアクセントの有用性を検証するという観点からも、すでに系統関係が確立している『アヴァクム自伝』の当該写本のアクセント位置の比較は効果的である。

比較するサンプルの収集にあたっては、両手稿からそれぞれアクセントが付されている語形のみを抽出

し、対応する語形のアクセント位置の異同をリストの形式で提示する。また対比可能なアクセント語形に関して、両文献でアクセント位置が一致しているかどうか、およびそのアクセントが写字生の言語規範に適合するものであるかどうかという基準による四つの区分を設け、転写本のアクセント語形を分類する。両文献のアクセントの一致率のみでは、写字生がオリジナルのアクセントをどれほど再現しようとしているかを判断するには不十分であるため、ここでは特定のアクセント形式に対する写字生の評価についても考え合わせるのである。

調査の結果わかったのは、『アヴァクム自伝』の19世紀の写本は17世紀に書かれたアヴァクムによる自筆稿の大多数のアクセント位置を保持している一方、オリジナルよりも書き手の規範意識が優先され、結果としてアクセント位置が変えられる場合があるということである。また、オリジナルと同一のアクセントを持っていても、それが写字生の言語規範とは一致していないと想定される例が指摘できる。たとえば二音節から成るいくつかの副動詞は、自筆稿においては第二音節にアクセントが置かれるのに対して転写本では第一音節にアクセントが置かれる傾向にあるが、『自伝』後半以降、転写本においても自筆稿と同様に第二音節にアクセントが置かれる例が複数現れる。この後半の例は、写字生の言語規範に適合しないがオリジナルに従ったものであると考えることができる。ここからオリジナルのアクセントに対する写字生の態度が窺い知れる。すなわち、写字生は本来のアクセントを尊重しようとするが、アクセント記号を付す上で写字生が重視したのは、誤って筆写されたおそれのある底本に書かれたままの表記ではなく、その表記と自らの言語規範とに基づいて写字生が割り出したオリジナルの書き手の意図であると考えられる。

ロシア語における斜格形と再帰代名詞との照応の統語的・意味的条件について

中野 悠希〔京都大学大学院〕

再帰代名詞 **свой** は、本来的な代名詞として用いられる以外に、「自分自身の」、「独自の」、「身内の」などの付加的意味を伴って性質形容詞的に用いられることがある。斜格形と再帰代名詞との照応現象を扱った先行研究では、**свой** は与格形や **для**+生格とは例 (1) のように本来的な代名詞として照応し得る一方、**y**+生格と照応する場合は常に例 (2) のように付加的意味が伴うと主張されている。

(1) **Скучно ему без своей кошки.**

「彼は自分の猫がいないと退屈だ。」

(2) **У каждого свой вкус.**

「それぞれに自分の (各自の、独自の) 好みがある。」

この「本来的な代名詞としての **свой** は **y**+生格と共起しない」という主張は、管見ではこれまで反証されていない。しかし先行研究では、**y**+生格と照応する **свой** が、前置詞句 (またはそれに相当する句) として状況語 (連用修飾語) を成す場合については論じられておらず、検証の余地があった。そこで本報告では、そのような統語環境で本来的な代名詞としての **свой** が出現可能かどうかを調査した。なお本報告が対象としたのは、**y**+生格が領域・縄張り (「~のもとで」) を表す用例のみである。

報告者はまず、上述の統語構造を持つ (3) の文についてインフォーマント調査を行ったが、その結果、(3) では **свой** は不適であるが、その語順を操作した (4) では **свой** が適格であることが明らかとなった (なお (3)、(4) とも **его** は適格)。

(3) **У профессора в придачу к [его / *своим]**

познаниям тоже есть палочка.

「教授は彼の／自分の知識に加え、杖も一本持っている。」

(4) **В придачу к [его / своим] познаниям у профессора тоже есть палочка.**

ここから、状況語中の **свой** は本来的な代名詞として **y**+生格と照応可能であるが、それは語順に条件づけられた現象である、という予想が立てられる。

свой の容認度に語順がどのように関与するかを明らかにするため、つづいて 20 世紀初めから現代までの言語資料を対象にコーパス調査を行った。**y**+生格と状況語 (今回対象としたのは **благодаря**+与格、**кроме**+生格、**несмотря на**+対格、**от**+生格、**при**+前置格の 5 つの形式) の共起例を調査した結果、状況語中の **свой** が本来的な代名詞として **y**+生格と照応している例が 10 例確認された。うち 8 例について、それぞれ語順を操作した例と併せてインフォーマント調査を行ったところ、事実上すべての例で、語順に関わりなく **свой** の使用が可能という結果になった ((5)、(6) は **при**+前置格の例。どちらも **ее** も適格)。

(5) **При всей [ее / своей] жестокости у нее на таких рука не поднималась.**

「彼女の／自分の残酷さを以てしても、彼女はこのような人たちを手に掛ける気にはならなかった。」

(6) **У нее при всей [ее / своей] жестокости на таких рука не поднималась.**

このように本報告では、状況語中の **свой** が本来的な代名詞として **y**+生格と照応し得ることを明らかにしたものの、語順の観点からその成立条件を特定するという試みには失敗した。また今回のコーパス調査では、状況語中で本来的な代名詞として **y**+生格と照応する **свой** の例が 10 例であったのに対し、同条件の人称代名詞の例は 232 例であった。なぜ両者の使用頻度に顕著な差が見られるのか、その理由が説明されねばならない。依然課題は多い。

ふたたび人名 Гюрги について

岡本 崇男〔神戸市外国語大学〕

中世ロシア年代記に見られる人名 Гюрги は、ビザンツ起源の洗礼名 Георгий (ギリシャ語 Γεώργιος) の東スラヴ語形であり、他の地域的・時間的バリエーション (Дюрги, Юрьи など) とともに実際には同じ音声を表していたという推定のもとに、「文字 Г+前母音字」という中世ルーシ文章語にとって規範に反する文字で成り立っている Гюрги という表記が持つ意義について検討すると、以下のような結論に達する。

(1) 正式形 Георгий は時代の変化に左右されない普遍的な形式であり続けたのだが、東スラヴ語形は 13 世紀から 14 世紀にかけて規範形式が Гюрги から Юрьи へ移行したと推定される。

(2) 「Г+前母音字」という正書法違反の文字結合が長期にわたって、あたかも規範形であるかのように使われ続けたのは、おそらく正式形 Георгий との起源的な関連性を想起させる効果がこの反則結合にあったからである。

しかし、この反則結合を構成する子音字が実際にどのような音声を表していたのかという疑問は残る。実際に、東スラヴ語形 Гюрги, Дюрги, Юрьи などを構成する ГЮ, ДЮ, Ю, ГИ, ДИ, БИ などに含まれる子音が「ビザンツの γ であり、古代ロシア語にはない音声であった」という意見を述べた研究者がいる (Boris Unbegaun) のだが、後口蓋摩擦音 [ɣ] が前母音と結びつくことが東スラヴ語では許されなかったのだから、「合法的な」実例は存在しなかったはずである。ただし、最終的に前口蓋摩擦音 [j] に収斂したことは、東スラヴ語形の末裔である Юрий の発音から容易に想像できる。したがって、この「古代ロシア語にはない音声」は [j] に近い音であったと考えてよいのかもしれない。

また、ロシア語の歴史方言学研究では、前母音字と結びつく Г が硬口蓋摩擦音となることを、東スラヴ語において /g/ が前母音と結びつくこと [j] で実現される方言があることと関係づける試みがある。ロシア語の方言の中には /g/ が後口蓋閉鎖音の [g] で実現される方言と後口蓋摩擦音 [ɣ] で実現される方言が

あるらしく、後者の方言の中には、/g/ の後に前母音が来ると軟子音化して [ɣ] となるのではなく、硬口蓋摩擦音 [j] で実現される方言があるという。特にノヴゴロドなどの北西ロシア方言に昔からこの傾向があるようなので、こうした方言地帯では Георгий が [juɾji] と発音されるのが自然なことだったのかもしれない。実際に、ノヴゴロドの白樺文書には Герьгии, Герьги, Июрьи, Июра, Июрьеъ, Юрьи, Юрьгии など様々な表記が見られ、前母音字の前の Г が硬口蓋摩擦音を表していたことを暗示している。

しかし、方言というのは人々がふだん口頭で意思疎通をするための媒体であり、本質的に文字の介在を必要としない。特に、中世のルーシの識字率はかなり低かったと考えられて、中世のルーシにおいては例外的に識字率が高い都市であったとみなされているノヴゴロドでも、他の地域と比べて相対的に識字率が高かっただけで、やはり多くの庶民は文字に親しんでいなかったと考えた方がよい。

従って、Георгий および Гюрги, Юрьи は東スラヴ語固有の音声体系に含まれない子音を含んでいたため、もっぱら書かれるだけの Георгий は安定した表記が保たれ続けたのだが、東スラヴ語形は現実の発音の影響を受けたために、表記が安定せず、時間的・空間的な種々のバリエーションを生み出すことになり、最終的に東スラヴ語の硬口蓋摩擦音 [j] に収斂したと考えられる。

結局、外来語の表記は一種の翻訳行為であって、それは「音声の翻訳」なのであろう。すなわち、言語 A の固有名詞が言語 B に受け入れられる時、もしその固有名詞の中に言語 B の音声目録に存在しない音声が含まれていたとすると、その音声は言語 B の固有の音声に置き換えられるか、あるいは近似的な音声によって再現される。そして、外来の音声が最終的に受け入れ側の言語の既存の音声に収斂するのか、あるいは異質な特徴を保ち続けるのかは、その音声およびその音声を含む語彙に対して話者が抱く価値観によって決まるのではないかと思われる。